

麒麟・その聖なる獣

—起源と図像の変遷をめぐって—

北 進一

はじめに

中華人民共和国山東省の曲阜は、かつて春秋時代(紀元前 770～前 476 年)の思想家である孔子(前 552～前 479 年)が儒教を広めた魯の国の首都で、今でも孔子を祀る壮麗な孔廟や孔子一族の墓所である孔林、孔家歴代の住居である孔府などがあり、それらは世界遺産に登録されている。そのなかの孔府は、北寄りに私的空間の内宅(寝殿)を置き、南に政務を行う役所(諸堂)が置かれた構造になっている。役所と内宅を区切る内宅門の内側の壁には、伝説上の強欲な怪獣である獫狫(図 1)が描かれている。獫狫は、太陽をも食らうという貪欲の象徴で、孔子の子孫に対する欲望の戒めのために表現されたものであるとされるが、その形態は日本のキリンビール株式会社の登録商標である麒麟像(図 2)に近似する。確かに壁面いっぱいに描かれた獫狫は、右上隅の太陽を食べようと口を開けており、その周りには巻物や瓢箪、笛などが雲気文とともに散りばめられているが、獫狫の身体は中国でも屈指の聖獣とされる麒麟と類似するのは不思議である。なぜ 獫狫 は、このように麒麟と同様な姿で表されるに至ったのか。その謎を解く鍵は、麒麟の起源とその図像の変遷に由来するものと思われる。本稿は、麒麟の起源とその図像的変遷を追究し、中国の代表的な聖獣である麒麟の実像に迫ってみたい。

1. 麒麟に関する起源説

(1) 麒麟の概要

麒麟は、前漢の宣帝(在位：前 74～前 49 年)の頃の成立とされる『礼記』礼運篇に「麟鳳龜龍、謂之四靈」とあり、古来より中国において龍や鳳凰と並ぶ聖獣とされている。儒教において第一の徳目である仁徳をそなえた仁獣、すなわち情け深い動物で、肉食はおろか、草などの植物も食料とせず、歩くときも草の芽を踏まず、虫を踏みつけることもない。そして有徳の王者の治世には姿を見せるが、殺生を好むような王者が国を治めているときは、姿を隠すと伝えられた霊獣である。孔子が、捕らえられた麒麟を見て涙を流した、というのも、その時代が「聖人の世」ではなかったからである。麒麟の特徴は、後漢の許慎が著した『説文解字』に「麒、麒麟、仁獣也。麋(なれしか)身、牛尾、一角」とある。また、後漢の何休が著した『春秋公羊伝解詁』には、麒麟の一角は武備のようにみえるけれども、実は先端に肉がかぶさっていて、他に危害を与えることはなく、それが麒麟の仁獣といわれるゆえんだという。さらに麒麟の体は麋(のろしか)に似て、足は馬、尾は牛に似る。全身から五色の光を放つという。雄は麒、雌は麟という異説もある。

麒麟の起源や成立については、古代オリエントから派生した一角獣表象の伝播説や中国古来の鹿崇拝による自然発生説、あるいは実在説など様々で、いまだ確たる結論は得られていない。『春秋公羊伝』(戦国末期～前漢初期)などの文献からすると、麒麟は、おそらく孔子の晩年、紀元前 481 年頃にはその存在が意識され、戦国末期から外来の仁獣として

認識され、後漢代に隆盛した天人感応思想に基づき、瑞獣として画像石などで盛んに図像化されてゆくが、その造形例となると、漢代より前のものは今のところ確認されていない。

そこで、まずそれぞれの起源説を検証してみよう。

(2) 伝播説

麒麟の源流を古代オリエントから派生した一角獣に求める説は、ヨーロッパの一角獣たるユニコーンの起源説と関連して論証されている。オデル・シェパードは、その一角性から唯一者であるイエス・キリストを象徴するユニコーンと、善政を行う聖王の治世のみ出現する麒麟の共通性を指摘し、2つの伝説の起源の同一性を推察した⁽¹⁾。ベルトルト・ラウファーは、著書『サイと一角獣』のなかで「古代から西アジアにおいて発達してきた、一角を持ったシカの観念が、芸術のモチーフとともに、インドと中国に伝播していったと考えるべきだろう。」⁽²⁾と主張している。しかしながらラウファーは、同著の注記で「“麟”は『詩経』や『礼記』にも、すでに物語られているので、おそらく中国土着の創造物であるようだ。」⁽³⁾と述べ、一角をもったシカと麟(麒麟)を区別しているようである。

一方、西洋の一角獣のルーツに関しては、紀元前3500年頃と推定されるメソポタミアのウル出土の遊戯盤に描かれたライオンと一角獣の闘争図を淵源として、アケメネス朝ペルシアのペルセポリス宮殿(前6世紀末～前5世紀)に頻繁に浮彫りされた一角獣(一角の牡牛)とライオンの闘争図や帝王の一角獣(一角の牡牛や一角のライオンあるいはグリフォン)狩り図に由来する意見がある。また、和泉雅人氏は「ヨーロッパ一角獣のもっていた乙女による誘惑モチーフもまた紀元前2600年頃のギルガメシュ叙事詩にその淵源をもっている」⁽⁴⁾としたうえで、ギルガメシュ叙事詩のインドへの伝播を介してユニコーンの源流を古代オリエントの一角獣に求める仮説を推断している。そのうえ和泉氏は、麒麟と古代インドのリシュヤ・シュリング、ヨーロッパ一角獣、ギルガメシュ叙事詩のエンキドゥの説話的共通項を抽出し、全世界的に広がる一角獣表象の関連性を追究した⁽⁵⁾。ただし、和泉氏は「麒麟の成立に関して、自然発生説といい、伝播説といい、いずれも決定的な証拠を欠く段階にある」⁽⁶⁾と慎重である。

(3) 自然発生説

麒麟が中国において独自に発生したとする自然発生説を主張したのは、出石誠彦氏である。出石氏は、「麒麟」という文字に含まれる“鹿”の字に注目し、「麒麟はその起源を鹿の崇拝に発しつつ、それが思想上漸次霊獣たる属性を付加して行くにつれ、終に実在の鹿とは異なるを要しその角が一角とされ、ついで霊獣としての属性も結成するに至ったものであろう」⁽⁷⁾と結論づけた。その根拠として、『抱朴子』などの文献に長寿長生の象徴獣として鹿が登場する点や、古代中国において白鹿が現われると吉祥をもたらすという祥瑞思想の影響、『山海経』などに異形の鹿が描写されており、これが鹿から麒麟への変容を暗示する可能性をあげた。

けれども、このような鹿の吉祥性と聖獣として麒麟がいつ頃むすびついたのかは不明である。また、手がかりとなる麒麟の文字のなかの“鹿”という形声符のほかに、諸文献や漢代画像石に刻まれた「騏驎」という“馬”の形声符をもつ異称もあるため、出石説の説得力は薄らいでしまう。ただし、春秋戦国時代には中国各地で一種の鹿崇拝が存在したことは確か(湖北省随州市曾侯乙墓出土の文物や河北省平山県中山王墓出土の文物などを見ると明白である)、下記するように中国北方から中央アジアの草原地帯に生息する大鹿

(トナカイの類のもの)がスキタイや匈奴など遊牧文化を媒介にして、麒麟の成立に関与したことは否定できない。

(4) 実在説

麒麟が実在する動物から由来した聖獣であるという説の根拠として、前漢の武帝(在位：前 141～前 71 年)に仕えていた司馬相如の詩『天子游獵之賦』があげられる。それによると、武帝は上林苑という一種の動物園を造営し、ゾウやサイやヤクなどの珍獣を住まわせ、各国の使節たちに見物させたり自ら狩りなども行っていた。上林苑の南には想像上の動物と思われるものもいるが、北には麒麟や 𪊑、プシバルスキー馬などがおり、江上波夫氏は麒麟を角𪊑 やプシバルスキー馬と同様に北方草原地帯に生息する実在の動物とみなしている⁽⁸⁾。江上氏の説によると、麒麟は前述の通り馬偏で「騏驎」とも書くため、馬のようになかなか大形の鹿で、馴鹿(トナカイ)のように角が大きい動物ではないかと推測している。馴鹿は、スキタイや匈奴など北方ユーラシアの遊牧騎馬民族の動物意匠として頻出するが、草原シルクロードの珍獣として中国へ輸入されたか、もしくは前漢の皇帝に献納された可能性が想像できる。このような西方産あるいは北方産の大型の鹿が後漢以降の祥瑞思想の隆盛にともない聖獣化したのではないかとする見解である。確かに、麒麟が儒教において仁獣とみなされる契機となった『春秋』哀公 14 年(前 481)春の記事には、前述したように孔子が嘆いたものであるが、「西に狩して麟を獲た」とあり、孔子が麒麟を西にいる聖獣と考えていたふしがある。しかし、この実在説に関してもあくまでも推測の域を出ない。

2. 鹿型麒麟と馬型麒麟

(1) 鹿型麒麟の作例

前章で麒麟の起源説について言及してみたが、古代オリエントからの伝播説にせよ、中国における自然発生説にせよ、実在の動物説にせよ、現状では決定的な証拠は見出すことができない。その理由は、麒麟が古代の文献資料において一角をもつ仁獣という以外に詳しい姿を記さない点と、後漢になって造形化された麒麟が龍や鳳凰と異なり一定のかたちを持たないことがあげられる。そこで、次に後漢時代(後 25～220 年)の麒麟像を通観してみよう。

現在、最初期の麒麟像の一つと考えられているのは、河南省偃師市寇店公社李家村の窖蔵(穴倉)から出土した青銅製の麒麟像(後 1～2 世紀。河南博物院蔵。図 3)である。高 8.6 cm、長 6.7 cm という小さな像。窖蔵に納められていた蓋つきの鍍金銅製酒樽の中から天馬(ペガサス)や牛、象などの一群の動物像とともに同形の 2 個の麒麟像が発見された。全身に鍍金が施され、目などの細かい文様が沈線で表されている。形態は鹿あるいは羊に似ており、頭上に先が丸くなった一角を立て、頸には房のような文様、肩には翼あるいは火炎のような文様が刻まれ、尾が馬のように垂れ下がり、蹄は丸い単蹄である。このような形は、諸文献にのる鹿型麒麟の姿とほぼ一致し、後漢代の典型的な麒麟像といえる。麒麟は、前漢までの文献ではその姿を詳しく記したものはほとんどなく、『春秋公羊伝』の麟を角のある「麇(のろしか)」とするのが最も早い例である⁽⁹⁾。その後、前記した『説文解字』に「麒、麒麟、仁獣也。麇(なれしか)の身、牛の尾、一角」と定義するが、この銅製鍍金の麒麟像はその定義にほぼ合致するものといえる。なお、この麒麟像の一角の先は球体をしているが、これも『春秋公羊伝解詁』の「麒麟の角は肉を戴き、武備を設けず、害をな

さないゆえに、仁獣である」という記述に付合する。本来、武器である一角を逆説的に否定することで、麒麟は不殺生の仁獣として孔子に尊ばれ、後に皇帝が善政を行った時に天からその行いを讃えるため降臨する瑞獣へと発展してゆく。また、蹄の形が単蹄なのは馬と同じであるが、生きた虫や草を踏まないようにわざわざ円く作られているとされる。偃師市窖藏出土の麒麟像は、このような意味からも天人感応説にそった瑞獣・麒麟像の典型といえるだろう。同様な鹿型麒麟像の作例として、後漢・建和元年(147)頃の山東省嘉祥県武氏祠画像石墓の拓本にのる鹿型の麒麟像(『石索』)があげられる。先端が球体の一角をもち、蹄は鹿と同様に偶蹄で体に斑文がある。

後漢末頃(2～3世紀)の造営とされる山東省沂南市の沂南画像石墓は、内部の石室に様々な画題の図像を表した山東画像石墓の代表といえるが、前室の天井梁石に鹿型の麒麟が線刻されている。先端が円盤形の一角をもち、体に斑文が表され蹄は偶蹄で、明らかに鹿を原像としていることが理解できる。しかし、肩には武氏祠画像石墓の麒麟像にはない翼を表現しており、後述する馬型麒麟にしばしばみられる翼との関連性が問題となる。

西域ローラン古城の高台墓地2号墓出土の「永昌」銘錦(新疆ウイグル自治区博物館蔵)には一角獣がデザインされており、偃師市窖藏出土の麒麟像と類似した形態をしていることから、麒麟像と推定できる。この「永昌(永く栄える)」という意味の吉祥銘文が織り込まれた錦には、山岳雲気文の間に龍や三本脚の鳥などの各種の瑞獣文が散りばめられていることから、この像が麒麟であることがわかる。後漢時代の中国内地での作とされるが、西域のローラン(楼蘭)でこのような麒麟像を表した錦が受容されていたことは、麒麟の西方的イメージと何らかの関係があるのかもしれない。

(2) 馬型麒麟の作例

後漢代の麒麟像は、上記の鹿型麒麟とともに馬型麒麟も存在する。後漢・元嘉元年(151)の江蘇省邳県彭城相繆宇墓出土の画像石には、先端が三角形を呈した一角と長い尾をもった馬型の動物(図4)が表されている。画像の横の榜題に馬偏で「騏驎」と書かれているため、馬型の麒麟であることが理解できる。なお、この馬型麒麟は、「稲徳羊」と榜題された同じ大きさの羊の後ろに従うように描写され、いずれも瑞獣として表現されたものである。

後漢の江蘇省徐州市睡寧県九女墩画像石には、先端が筆のような形をした一角の馬型麒麟が描かれており、両肩には羽が生えている。この画像では、羽衣を着た羽人に先導されていることから、やはり天人感応思想に基づき、天帝より地上に下された瑞獣として麒麟が表されたものであろう。後漢代には、鹿型の麒麟像とならんで馬型の麒麟像も瑞獣として表現されたことが理解できるが、特に九女墩画像石の麒麟像は、肩に羽根が描かれているため、その原像として西方のペガサスを考慮に入れる必要もあろう。

(3) 魏晋南北朝時代の馬型麒麟と鹿型麒麟

後漢が滅亡し魏晋南北朝時代(221～581年)になると、麒麟像も新たな展開を示すようになる。1957年に河南省鄧州市(旧鄧県)学荘村の彩色画像磚墓(5～6世紀)から出土した画像磚には、典型的な馬型麒麟が表されている。折れ曲がり先端を巻いた一角をもつ有翼の馬型麒麟が口を開き、雲の上を疾駆する躍動的な姿で描かれ、ここにも榜題に馬偏で「騏驎」と書かれている。しかし、この馬型麒麟は、同じ画像磚墓から出土した四神図磚中の青龍像と極似していることが注目される。青龍像は三爪であり馬型麒麟の単蹄とは区別さ

れているが、頭に先端を巻いた一角をもち、体は馬型で肩には翼をもち口を開いて、同様に雲上を疾走するように描写されている。前章の冒頭に載せた『礼記』礼運篇に「麟鳳龜龍、謂之四靈」とあるように、麒麟は古来四靈のなかの一聖獣とされたが、四神はその四靈から麒麟が外れ白虎が入ったものという説もある。この四神図塼中の青龍像が麒麟に近い姿をしている点は四神の起源にまで遡ってイメージされたのかもしれないが、ここでは麒麟と龍との図像的混淆が注目される。宋代以降の麒麟像が、キリンビールの麒麟像のように、全体に獅子の体つきをして龍のような鱗をつけている点を考慮すると、後世の麒麟像の変容を暗示するものといえるだろう。なお、この画像塼墓は南朝の支配地域に属しており、後述する南朝陵墓の石造麒麟像との関連も示唆深い。

一方、北朝では北魏・神亀3年(520)銘をもつ元暉墓誌の4つの側面の各2頭の四神像のうち、北面の玄武と一緒に表された鹿型麒麟(図5)が興味深い。この像は、斑文のある鹿の体をして、先端を巻いた一角、翼、単蹄を有し、下方の山岳の上に雲気とともに天かける姿で表現されている。

これら2例の麒麟像は、馬型と鹿型の違いはあるが、いずれも天空を疾駆しているように表され、特に元暉墓誌の麒麟は四神と同列に並べられている点が問題である。本来、四神は、天の四方の星宿を象徴すると同時に、その方角を守る聖獣で、東は青龍の木、西は白虎の金、南は朱雀の火、北は玄武の水とされる。この四神が、五行思想に基づき従来の四靈と結びつくと、五靈という考え方が成立し、麒麟は五行の土を当てられ中央に配される。元暉墓誌の麒麟像は、おそらくこの五靈中の麒麟とみなされ、天上世界の中央を守る守護聖獣として表されたものであろう。鄧州市学莊村出土画像磚の麒麟像も、同じ画像磚墓出土の青龍や白虎の図像と同様に、口を開け歯をむき出して威嚇の姿勢を示していることから、天空の守護獣の役割で表現されていると推定できる。

ところで四神といえば、前漢末から後漢にかけて流行した方格規矩四神鏡などの銅鏡に一角獣が表現されている点も重要である。この方格規矩四神鏡の一角獣は、内区中の朱雀と白虎の間の西南方角に時より配されるもので、羊に似た体をしたものがあり、これも麒麟の可能性がある。前記した李家村窖蔵出土の鹿型の鍍金麒麟像が羊の体にも似ていたことを考慮すると、この方格規矩四神鏡の一角獣を初期の麒麟像とみなす傍証になるのかもしれない。だとすると、後漢以降の画像鏡に見られる、一部の研究者が辟邪や天禄と呼ぶ一角獣や二角獣との関係が問題となる。

1991年に甘肅省敦煌市の西晋時代(265~317年)の仏爺廟墓群から出土した画像磚の麒麟像は、疾走する、先が丸まった一角をもつ麒麟で、榜題に鹿偏で「麒麟」と書かれている。この墓群からは、青龍や白虎などの聖獣や、鹿などの動物を表した画像磚が多量に出土しており、その鹿とこの麒麟は少し形態が異なるが、やはり偃師市窖蔵出土の鹿型の鍍金麒麟像と同じく仁獣としての鹿型麒麟の系譜に属するものであろう。この像の疾走している点は元暉墓誌の麒麟像と共通し、同出の青龍や白虎の画像塼を考慮すれば、あるいは天空の守護獣の役割もおびているかもしれない。

3. 南朝帝陵の麒麟像

(1) 南朝帝陵の石獣の概要

前章で後漢から魏晋南北朝時代の鹿型麒麟と馬型麒麟の実例をみてきたが、南北朝時代

になると、鹿型麒麟にせよ馬型麒麟にせよ、肩に翼がつき天空を疾走するように表現されてゆくことが理解された。これは、四神と同じく天の守護聖獣としての麒麟のイメージが強まったことを意味するのであろう。そして、この天空の守護獣・麒麟が南朝では、皇帝の墓である帝陵を守る石獣として地上の参道に置かれるようになる。

現在、南朝帝陵の石獣は江蘇省南京(南朝当時の都・建康)郊外と、南京の東方 80 km の丹陽との 2 か所に残されている。齊(479～502 年)と梁(502～557 年)の両王朝は丹陽を帝陵区と定めたためここに石獣が置かれ、宋(420～479 年)と陳(557～589 年)の両王朝は帝陵区を特に定めることがなかったため、南京郊外に分散して帝陵の石獣が造られた。また、皇帝一族の諸王の墓にも石獣が現存しているが、多くは梁代のもので、南京東郊の甘家巷一带に一部集中するほか、郊外に散らばっている。ただし、帝陵と諸王墓とでは石獣に形式上の明確な区別がされ、帝陵の場合は頭頂に角を 1 本あるいは 2 本もつ石獣、諸王墓の場合は舌を垂らしたてがみをもつ獅子型の石獣であった。

これらの石獣は、参道入口に道をはさんで左右両側に 1 体ずつ向き合って配された。概して諸陵墓の参道には、石獣・石柱(神道柱、華表)・石碑が一对で並び立つが、入口から墓までの参道の長さは様々である。

ところで、南朝帝陵の石獣の名称について曾布川寛氏は、従来の右の一角獣を天禄、左の二角獣を辟邪と呼ぶ説や、右の一角獣を麒麟とし、左の二角獣を天禄とする見解をしりぞけ、『南齊書』『梁書』などの文献に、一様に麒麟(騏驎)と記載されている点から、両像とも麒麟とするのが妥当であると提唱されている⁽¹⁰⁾。また、麒麟は「鳳凰・麒麟は聖王のために来る」(『論衡』指瑞篇)とあるように、もともと鳳凰と同じく、為政者が徳の高い政治を施すと天上世界から地上に下される瑞獣であるが、ここでは参道入口にあって墓を外敵から守護する鎮墓獣となっている。なお、曾布川氏は便宜的に右側の一角石獣を右麒麟、左側の二角石獣を左麒麟としているので、本稿もそれに従って南朝帝陵の代表的な麒麟像を検証してみる。

(2) 南京・麒麟鋪の宋・武帝初寧陵の麒麟像

南京市街の東郊、江寧県麒麟門の北の麒麟鋪には、一对の石獣(左・高 280 cm、右・高 256 cm)が残る。この石獣は従来から、唐の許嵩の『建康実録』などの記事に基づき、永初元年(420)に宋の王朝を創業し、永初 3 年(422)に崩じた武帝劉裕の初寧陵のものに比定されている。後漢滅亡後、東晋まで薄葬令が敷かれ、陵墓に石獣が置かれなかったため、この一对の石獣は南朝最初のものとして重要である。

石獣は、いずれも顎の下に髭を垂らして肩に翼をつけ、頭を上に向け口を大きく開け、胸を反らして奥の足を前に出している。両像とも損壊が著しく、右石獣は顔の正面がほとんど壊れ、左石獣の四肢をすべて欠き尾も折れている。比較的保存状態の良い右麒麟(図 6)をみると、ずんぐりとした体軀をなし(頭上の一角は破損)、頸は太く短く、胴体は丸く太く、四肢もがっしりとして、鋭い爪で土をつかみ踏ん張っており、全体にどっしりとした重量感をかもし出すとともに頭・胴・肢の身体各部の分節化が明確ではない点、どこか素朴さを感じさせる。このような素朴さは体軀のわりに翼が小ぶりな点も指摘できるが、いずれにしても従来の麒麟像とは異なり、鹿型とも馬型ともいえない。また、前脚の付け根から体部方向に翼が伸び、翼の基部には鱗状の表現と半パルメット風の表現がみられる。この石獣で特筆すべき点は、前脚の肘につく三角形の毛で、これは長毛と呼ばれる獅子特

有のものと思われる。とすれば、この石獣は西方伝来の獅子の影響が看取され、後漢代の墓前に置かれた鎮墓獣としての獅子像との関連性が問題となる。例えば後漢・建和元年(147)の山東省嘉祥県武氏祠画像石墓の石獣(高 124cm。嘉祥県文物管理所蔵)は、同じ墓の石闕の銘文に「師子」と明記されているため獅子像と理解できるが、頭部が大きく胴も脚も太く、どっしりとヴォリューム豊かに作られ、たてがみもはっきり表され、明らかに西方から伝来したライオンのイメージが濃厚である。

ところで獅子は、『後漢書』西域伝に章和元年(後 87)安息国(イラン高原のパルティア王国とされる)が献上したとあり、これが中国に伝来した古い記録である。しかし、『前漢書』卷 96 上・西域伝の烏弋山離国に「桃拔(トウバツ)・師子・犀牛」がいたとあるように、それ以前から存在が知られていただけでなく、中国にもたらされていた可能性もある。武氏祠画像石墓の獅子像のほか、1927 年ごろ山東省臨淄(現淄博市)にあった石獣などもたてがみの表現が顕著で獅子とされるが、これら後漢代の獅子像には一応に翼がついていない。

一方、後漢後期(2世紀)の代表的な鎮墓獣の例として、1954 年河南省洛陽市洛河の岸で出土した一對の石獣中の二角獣(高 109cm。洛陽石刻芸術館蔵)があげられる。体型は胴長で虎に近く、頭頂に角が 2 本あって、顎鬚を垂らし、肩に翼がはえており、南宋・武帝初寧陵の二角をもつ左麒麟の祖型といえる。この石獣の名称については、同じく『前漢書』西域伝の烏弋山離国の「桃拔」についての、曹魏・孟康の注に「両角のあるものは、あるいは辟邪となす」とする点などから、辟邪とみなせる。洛河石獣のもう 1 体は曲がった角をはやした一角獣であるが、体型はほぼ同型。近年このような虎型辟邪の起源に関して、河北省平山県の戦国時代の中山王墓から出土した銀象嵌の双翼神獣が有力視されている。この双翼神獣の頭部は中国の伝統的な聖獣である虎の頭をしているが、両肩に見事な翼がついており、北方遊牧民のスキタイあるいは匈奴から伝わったグリフォンなどの有翼獣の影響を指摘する説もある。

以上、宋・武帝初寧陵の一對の麒麟像については、後漢代の典型的な虎型辟邪像に西方起源で新来の獅子像が折衷された形態を示し、麒麟の起源や図像的変遷を考察するうえで見逃せないものといえるだろう。

(3) 丹陽・仙塘湾の斉・景帝修安陵

丹陽市胡橋仙塘湾の帝陵は、建武元年(494)に造られた南斉・景帝蕭道生の修安陵に同定されており、参道に一對の石獣(左・高 275 cm、右・高 242 cm)がほとんど完全に保存されている。この石獣は 74 年前の南宋・武帝初寧陵の石獣に比べ、体表の文様や装飾がにぎやかになっており、体型が胴長で全体にかなりひねりが加えられ、実に躍動的な感じを受け、洛陽洛河石獣のような虎型辟邪に近いものになっている。現存する南朝陵墓の石獣中最高のさくゆきを示すが、この像には獅子の特徴をほとんど見出せない点が興味深い。また、右麒麟の股間には睾丸とペニスが彫り出されているため雄とわかり、左麒麟(図 7)の股間には睾丸もペニスもないので牝とわかる。つまり、この一對の麒麟像は、右の一角麒麟が雄、左の二角麒麟が牝と判断でき、晋の郭璞注の『徴祥記』に記す「牝は麟、雄は麒」と対応するのかもしれない。帝陵の一對の石獣が、雌雄の麒麟とみなされていた傍証となる。

(4) 丹陽・三城巷の梁・武帝修陵

丹陽市荊林三城巷の梁・文帝建陵の北約 360m のところに、保存の完好的な二角の左麒麟(高 280 cm、図 8)だけが一体だけ置かれている。皇帝の座に 48 年間君臨し南朝最大の繁栄

をもたらした梁の武帝蕭衍の墓の石獣である。『南史』梁本紀には、大同 10 年(544)に武帝が蘭陵に行幸して、父の文帝夫妻の建陵と妻の郗皇后を葬った修陵に謁陵し、皇基寺(皇業寺)で法会を設けたとある。後に侯景の乱で幽閉され餓死同然に崩じた武帝は、太清 3 年(549)にこの修陵に合葬されることになった。

この石獣の形態は南齊・景帝修安陵の虎に近い体型から、獅子に近い体型に変わっており、横に幅の広い大きな頭部、前脚の肘部の三角形をした長毛など明らかに獅子が意識されている。唐代を経て北宋以降、麒麟はキリンビールの登録商標のように獅子のイメージが顕著になるが、この梁・武帝陵の麒麟は、獅子の形態をもった麒麟像の淵源とみなせるのかもしれない。梁・武帝の崇仏を考慮に入れると、仏教美術の獅子像、例えば仏像の台座の前に置かれた獅子像などの関係性が示唆される。

4. 推論・麒麟の起源と原像

文献からすると、麒麟は、おそらく孔子の晩年、紀元前 481 年頃にはその存在が意識され、戦国末期から外来の仁獣として認識されるが、その確実な造形例としては後漢代の鹿型麒麟と馬型麒麟をまたなければならない。もちろん、戦国時代から前漢代までに麒麟が図像化されていたことは確かだろうが、実際どのような姿で表されていたのかは現時点で明確ではない。前漢中期の洛陽・ト千秋墓天井画の昇仙図に描かれた、体に鹿のような斑文があり、長い尾をつけている無角と一角の 2 頭の有翼獣を、曾布川氏のように麒麟とみなすことも可能である⁽¹¹⁾。しかし、この両像は、正確には吉村萱子氏が言われるように、烏弋山離国にいた「桃拔」と「天禄(天鹿)」に当てる方が妥当だと思われる⁽¹²⁾。先にのべた曹魏・孟康の注では、「桃拔、一名符拔(フバツ)、鹿に似て長尾。一角はあるいは天鹿となし、両角のものはあるいは辟邪となす」とあり、吉村氏は「このような烏弋山離国の動物である符拔と天禄が、崑崙山の入口である弱水の場所を熟知しているため、翼が与えられることになり、仙界への案内者として脚光を浴びることになった」と指摘している⁽¹³⁾。烏弋山離国は、一般に今のアフガニスタン・カンダハルの地であるとされが、その動物である「桃拔」は、無角の「符拔」、一角の「天禄」、二角の「辟邪」の総称とされ、「師子」や「犀牛」とともに漢代には西王母の住む崑崙山への先導者と考えられていたようである。ただし、この「桃拔」が実際アフガニスタンに棲息していた動物であるか否かは、わからない。しかしながら、漢代の人々が認知した、この「桃拔」こそ、鹿型麒麟の一つの原像ではないかと考えられる。おそらく、「桃拔」は、戦国末期から前漢にかけて中央アジアや北方ユーラシアより実物、あるいは図像が伝わり、それが『公羊伝』の角のある「麇(のろしか)」や『説文解字』の麋(なれしか)の身、一角」という姿に近かったため、麒麟として表されていったのではないだろうか。実在の動物としては、北方ユーラシアの馴鹿(ナレシカ)、つまりトナカイのような馬に似た角の大きな鹿などが考えられる。このようなナレシカは、麒麟が馬型として表されたことの傍証となるが、スキタイや匈奴の動物意匠として頻繁に登場し、側面形として角が一本に見えるものがある。麒麟の一角獣としての表象も、あるいはこのような北方騎馬民族の動物意匠をヒントにしているのかもしれない。例えば、北朝鮮・平壤の貞柏里古墳から出土した銀打出文・飾金具の一角獣などは、一角有翼の鹿のような馬のような形をしている。多分、グリフォンとナレシカの合成獣であろう。このような聖獣の図像を、漢民族が麒麟として受容した可能性が考えられる。

また、馬型麒麟の原像の一つに、中央アジアの大宛国、フェルガナに棲息し、前漢・武帝が將軍李広利を遠征させ三千頭を得たという、天馬の子孫の汗血馬も考えられる。汗血馬はまさに実在の動物であるが、榜題に馬偏で「騏驎」と書かれた、彭城相繆宇墓画像石の麒麟像との関連が想起できる。この馬型麒麟の場合は、徐州・九女墩画像石のように肩に翼がつくものも多く、西方のペガサスとの関係性が問題となるが、麒麟が瑞獣として天から使わされた時に翼の表現が付けられたのかもしれない。漢代の各種銅鏡に表された有翼獣の中にも、天の方角を守る麒麟像が隠れている可能性があるが、それらの形は一様でなく、判別が困難である。

そして、このような天界の守護聖獣としての有翼獣は、南朝時代の帝陵において、天から下された鎮墓獣として参道に一角・二角の一对で置かれた。それらは、体型が鹿や馬ではなく、後漢代に天禄や辟邪と呼ばれた、「桃拔」とは別系の伝統的な虎型の鎮墓獣を祖型としたものと考えられる。しかしながら、鹿型麒麟の「桃拔」も中国において一角の「天禄」や二角の「辟邪」とみなされていたため、六朝帝陵の一对の石獣と混同し、それらの石獣が天帝から下された皇帝の霊を守る麒麟と呼ばれたのではないだろうか。さらに、六朝帝陵の麒麟像は、西方伝来の最新の鎮墓獣である獅子の体型の一部を取り入れ、その形態を変容させ、後世の獅子型麒麟の礎になったものと思われる。

おわりに

後漢時代に大別して鹿型と馬型の2種の姿で表されていた麒麟像は、南朝の帝陵において獅子の体型の一部を取り入れ、その形態を変質させた。しかし、陝西省咸陽市郊外の唐・咸亨元年(670)に亡くなった武則天の母・楊氏を埋葬した順陵の一对の石獣像は、いずれも頭に一角があり翼をもった麒麟像で、伝統的な馬型麒麟を基にしたかたちである。従来、この像は天馬(ペガサス)とみなす説が一般的であったが、南朝帝陵の石獣が麒麟像と考えられていた点、首にたてがみがない点、一角獣である点、武則天と高宗の合葬墓である乾陵の天馬像との比較などの理由により、馬型麒麟とみなすことができる。このように、唐代になっても麒麟は基本的に馬型か鹿型であったと推測できるが、宋代になると獅子型に大幅な変貌をとげる。そのかたちは、一角であれ二角であれ、一様に顔に獅子のようなたてがみがあり、胴体が一面に鱗文でおおわれ、足も偶蹄である。このような獅子型麒麟がいつ頃から登場したかという点、少なくとも北宋末・元符3年(1100)勅撰によって李誠が著した建築技術書『营造法式』に掲載された装飾図案の麒麟像まで遡ることができる。この図像は獅子、狻猊(サゲイ)、獬豸(カイチ)とともに獅子の項に載っているように、全体に獅子の体つきをし、二角、偶蹄に描写されているが、最も特徴的なのは体の鱗文である。この鱗文は、前記した南北朝時代の四神中の青龍と近似した麒麟像に淵源が求められるのかもしれない。明代になると、南京の太祖洪武帝(在位：1368～1398年)を埋葬した孝陵の参道に立つ麒麟像や、北京郊外の成祖永楽帝(在位：1402～1424年)以下の皇帝を葬った明十三陵の麒麟像(図9)も『营造法式』に描かれた獅子型麒麟像の形態を示すようになる。

本論の冒頭で取り上げた孔府内宅門の獬豸は、一角をもちたてがみをつけ胴体に鱗文がある。これは、明らかに明代以降に一般化した獅子型麒麟を意識した形態といえるだろう。その理由の一つは、西方伝来の桃拔を原像とする麒麟が中国社会に浸透する契機となった『春秋』における孔子の言説である「獲麟」に由来し、孔子あるいは儒教と麒麟が深く結

びついていったことにあるのだと筆者は推察するのである。

(注)

- (1) Odell Shepard, *The Lore of the Unicorn* (Avenel Books, New York, 1982) 参照
- (2) ベルトルト・ラウファー『サイと一角獣』(武田雅哉訳、博品社、1992年、48頁)
- (3) ラウファー同書(150頁)
- (4) 和泉雅人「麒麟考試論—麒麟表象の淵源をめぐる考察—」(『慶應義塾大学 日吉紀要 ドイツ語学・文学』34号、2002年、14頁)
- (5) 和泉同論文(19頁)
- (6) 和泉同論文(18頁)
- (7) 出石誠彦「支那の古文献に現はるる麒麟について」(『支那神話伝説の研究』中央公論社、1943年、増補改訂版<1973年、181頁>)
- (8) 『夢百年—聖獣伝説』(監修・江上波夫、講談社、1988年) 参照
- (9) 麒麟について言及している『春秋公羊伝』以前の主な文献資料は以下の通りである。
『毛詩(詩経)』国風周南(前8世紀頃?)「麟の趾(アシ)、振振たる公子あり、ああ麟なり
麟の定(ヒタイ)、振振たる公姓あり、ああ麟なり。麟の角、振振たる公族あり、ああ麟なり」。
なお、この詩は周の公子・公族たちの美しき姿を麟の趾や定や角の美しきさまになぞらえて唱ったものであろうから、ここに示された麟は、すでに美しく優雅なる
獣として理解されたことが判明する。
『孟子』公孫丑上(戦国時代)「麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥」
『管子』封禪(戦国時代)「今鳳凰麒麟不來、嘉穀不生」
- (10) 曾布川寛「南朝帝陵の石獣と磚画」(『東方学報』京都 63、1991年) 参照
- (11) 注 8 文献参照。
- (12) 吉村苜子「中国墓葬における独角系鎮墓獣の系譜」(『MUSEUM』583号、2003年) 参照
- (13) 吉村同論文(55頁)

<図版名称および出典>



(図1) 山東省曲阜市孔府内宅門の獫狫・筆者撮影



(図2) キリンビール株式会社の登録商標の麒麟

…『夢百年—聖獣伝説』(監修・江上波夫、講談社、1988年)18頁



(図3) 河南省偃師市李家村窖藏出土の麒麟像

…『世界美術大全集 東洋編 第2巻 秦・漢』(小学館、1998年)該当図版



(図4) 江蘇省邳県彭城相繆宇墓出土画像石の麒麟

…『徐州漢畫象石』(江蘇美術出版社、1985年)該当図版



(図5) 北魏・神亀3年(520)銘元暉墓誌の麒麟
・『西安碑林』(編者・西川寧、講談社、1966年)該当図版



(図6) 江蘇省南京市麒麟鋪の宋・武帝初寧陵の麒麟像
・『図録 中国南朝陵墓の石造物 南朝石刻』(奈良県立橿原考古学研究所、2002年)該当図版



(図7) 江蘇省丹陽市仙塘湾の齊・景帝修安陵の麒麟像
・『図録 中国南朝陵墓の石造物 南朝石刻』(奈良県立橿原考古学研究所、2002年)該当図版



(図8) 江蘇省丹陽市三城巷の梁・武帝修陵の麒麟像
..『図録 中国南朝陵墓の石造物 南朝石刻』(奈良県立橿原考古学研究所、2002年)該当図版



(図9) 北京市明十三陵の麒麟像..筆者撮影